森幸安「摂州大坂旧地図」・「大坂分町地図」の利用について

佐藤健太郎

本報告書には、国立公文書館所蔵「摂州大坂旧地図」・「大坂分町地図」（以下、「旧地図」・「分町地図」とする。）のトレース図を収録した。以下、「旧地図」・「分町地図」、両図を作成した江戸時代の地図考証家の森幸安（ゆきやす）（森謹齋）について説明する。

森幸安は、元禄 14 年（1701） 5 月 14 日京に生まれ、幼名を「金吾」と称した[1)]。本名ははじめ「平八良珍重」としたが、元文 2 年（1737）に「左球」、元文 4 年（1739）には「幸安」に改称した。幸安は香具屋・香具師として働いたが、享保 14 年（1729）に隠居し、翌 15 年には京を離れて摂津に移り[2)]、多くの地図を作製した。

「旧地図」（宝暦 2 年作製）・「分町地図」（宝暦 7 年作製）は、森幸安が寛延 2 年（1749）より宝暦 7 年（1757）までの 10 年の歳月をかけて作製した解説付地図集『日本志』所収の地図で、『日本志』の多くは、現在国立公文書館に『日本輿地図』として所蔵されている。

『日本輿地図』は 222 舗の地図からなり、その内容は天文図・世界図・日本図などである[3)]。幸安はこれらの地図を作製するにあたり、幸安以前に作製された各地域の地図（原図）を収集し、さらに現地に赴き（巡視）、文献・現在の情報を収集（聞問）している[4)]。幸安は得られた情報をもとに原図の内容を校正したり、「土圭の法」を用いて原図の縮尺を正したりもしている。幸安はさらに地図をみる時に参照できるように地図の周りに情報（識語）を書き込んでいる。

『日本志』は優れた内容をもつものであったが、幸安には『日本志』を販売する意図はなく[5)]、『日本志』は世間に流布することはなかった。その結果、『日本志』は幸安の子弟・門弟のみに伝わることになったが、明治 11 年（1878）に内務省地理局地誌課が地誌編纂のためにその一部を購入した[6)]。それらの地図は明治 23 年（1890）に内閣記録局所管内閣文庫に移管され、上述したように現在では国立公文書館が『日本輿地図』として所蔵している。

『日本輿地図』の中には大阪府関係のものが 31 舗あり、とくに大坂に関するものが 9 舗ある。そのうちの豊臣期の大坂を描いた「旧地図」・「分町地図」のトレース図を作成し、本報告書に収録した。次に両図の法量などを掲示する[7)]。

（1）摂州大坂旧地図

【整理番号】177 － 0001

【員数】1 舗

【表題】日本輿地　畿内部　大坂旧地図

【内題】日本志　畿内部　大坂旧地図

【成立年代】宝暦 2 年（1752） 8 月 11 日

【内容年代】慶長 17 年（1612）

【法量】1 舗　51.6㎝× 77.7㎝

【縮尺】144000 分ノ 1

【蔵書印】大日本帝国図書印
【形態】手書手彩
（２）大坂分町地図
【整理番号】177 － 0001
【員数】１舗
【表題】日本輿地　畿内部　大坂分町地図
【内題】畿内部　摂津国　天正十三年分町慶長十七年著図　大坂分町地図
【成立年代】宝暦７年（1757）２月６日
【内容年代】慶長 17 年（1612）～宝暦７年ヵ
【法量】81.6㎝× 116㎝
【縮尺】81000 分ノ 1
【蔵書印】大日本帝国図書印・地誌備用図籍之印・明治十一年購求
【形態】手書手彩

それでは、両図に対する評価･留意点などをまとめる。まず「分町地図」からみていく。「分町地図」は、豊臣秀吉による天正 13 年（1585）の町立から慶長 17 年（1612）にいたるまでの城下町形成過程を表現した図である[8)]。識語によると、「分町地図」は宝暦７年（1757）に森幸安が高橋里右衛門所蔵「慶長 17 年の古地図」を模写し、考証を加えたものである。なお原図を所蔵していた高橋家は大坂町方同心をつとめた家である[9)]。

矢内昭氏は、本図は豊臣期城下町の復原・町形成の過程を表現したもので、本図に江戸中期における豊臣家追慕の風潮を背景として失われた過去を探りつつ故老の談を集めフィールドワークを続けた形跡がうかがえると評されている[10)]。本図は高橋里右衛門所蔵「慶長 17 年の古地図」をもとに、幸安が様々な情報をもとに考証したものであり、そのなかには誤りのあることが矢内氏・大澤研一氏によって指摘されており[11)]、本図の利用の際には注意を要する。

次に「旧地図」をみると、本図は宝暦２年（1752）に「旧図」に基づいて作製されたものである。その内容は、先の「分町地図」を簡略化したものである。本図について、矢内氏は比較的早期に資料化された分町地図の原図が破損して不分明のためその内容補充に活用されたらしいと述べられている[12)]。なお「旧地図」の識語には、幸安の本図の作製の意図がうかがえる興味深い記述があるので、引用する。

> 凡ソ此ノ輿地、初メ難波ノ古図ヲ見テ此ノ図ヲ見ル可シ。此ノ旧図ヲ見テ近世大坂ノ図之ヲ見ル可シ。近世図ヲ見テ今ノ大坂図ヲ見ル可シ。然ル則、此ノ地、転シ栄エ、海浜ニ至マテ尤連続スル者也

上杉和央氏によると、本内容は「難波ノ古図」（北野天満宮所蔵「津の国難波古図」か）→「此ノ図」（国立公文書館所蔵「日本輿地　畿内部　大坂旧地図」）→「近世大坂ノ図」（国立公文書館蔵「近世大坂」）→「今ノ大坂図」（国立公文書館蔵「日本志　畿内部　官上大坂地図」）の順番でみると、大坂の栄えていった様子が理解できるというもので、識語から上杉氏は幸安がこれらの地図の連関性を意識していたと指摘される[13)]。

以上、諸氏の研究成果によりながら、森幸安や「旧地図」･「分町地図」について述べてきた。これまでも森幸安や『日本志』（『日本輿地図』）は一部の歴史地理学・古地図研究者には知ら

れていたが、一般には知られておらず、その地図もあまり使用されてこなかった。矢守一彦氏は森幸安を「ナゾのカルトクラファー」と称されたが[14]、国際日本文化研究センターによる調査（辻垣晃一氏・森洋久氏）や上杉和央氏の研究によって[15]、「ナゾ」と称された森幸安や幸安作製の地図の価値・特質が明らかになりつつある。

森幸安に関する研究の進展に伴い、近年森幸安作製の地図が利用されはじめている。西本昌弘氏は、平安時代の難波行宮・大江御厨儲宮の所在地を検討されるなかで「旧地図」・「町地図」の天神橋の旧名の記述にふれられている[16]。和島恭仁雄氏は幸安作製の「日本志　郷庄部　摂津国川辺郡伊丹地図」にみえる地名が、近世の伊丹市の歴史を考える上で有益なものであると指摘されている[17]。

また、大澤研一氏は「旧地図」・「分町地図」などの「伝豊臣期図」には後世の情報や誤りが混じっており豊臣時代のものとして利用することはできないが、惣構南面堀などの活用可能な部分を慎重に見極めることで、「伝豊臣期図」は豊臣期の地理環境を考える素材として有用な図であると指摘されている[18]。

３氏の研究成果からみて、森幸安作製の地図・情報は地域史研究で有益なものであると思われる。ただ大澤氏が指摘されるように森幸安作製の地図・情報を利用する際にはその内容・情報を十分に精査しなければならない。その上で、森幸安作製の地図・情報を利用することによって古代・中世・近世の大阪地域の歴史がより豊かに描ける可能性があると確信する。

【註】

1）森幸安については、柴田勅夫「森幸安とその著作図」（日本地図資料協会編『古地図研究』本編、国際地学協会、1978 年）、辻垣晃一・森洋久編著「本論―識語を中心に」（『森幸安の描いた地図』、国際日本文化研究センター、2003 年）、岡田俊裕「森幸安」（『日本地理学人物事典　近世編』、原書房、2011 年）などを参照。

2）辻垣晃一氏・森洋久氏は、幸安が摂津に居を移した背景に当代随一の地図収集家の大阪天満宮祝部・渡辺吉賢の存在を指摘されている（辻垣晃一・森洋久註（1）論文）19 頁。

3）辻垣晃一・森洋久「索引」（『森幸安の描いた地図』、国際日本文化研究センター、2003 年）。

4）辻垣晃一・森洋久註（1）論文 10 ～ 15 頁。

5）神戸市立博物館所蔵「摂津州画図」識語「号二日本志一、然無二桜鐫之意一、顧為レ遺二於後世一也、」

6）三好唯義・和島恭二雄「地図学者森謹斎幸安と伊丹」（『地域研究　いたみ』34、2005 年）146 ～ 148 頁。

7）トレース図の作成にあたり、国立公文書館で両図を実測した。法量などについては、辻垣晃一・森洋久註（1）報告書（238・239 頁）、柴田勅夫註（1）論文（109・128 頁）などを参考にしてまとめた。

8）「分町地図」識語。なお本地図の概要については、矢内昭氏の研究が詳しい（矢内昭「大坂上町の町割と町並」（『大阪府の歴史』８、1977 年）10・11 頁。

9）『公仕要覧』（安永６年版）・『大坂武鑑』（天明元年版）。矢内昭註（８）論文９頁

10）矢内昭註（８）論文９頁。

11）矢内昭註（８）論文。大澤研一「豊臣期大坂城下町図について」（大阪市立大学豊臣期大坂研究会編『秀吉と大坂城と城下町』、和泉書院、2015 年）。

12）矢内昭註（８）論文 11 頁。

13）上杉和央「古図のある風景」（脇田修監修、小野田一幸・上杉和央編『近世刊行大坂図集成』、創元社、2015 年）75 頁。

14）矢守一彦「遠近道印と沢田呂少」（『古地図と風景』、筑摩書房、1984 年）316 頁。

15）辻垣晃一・森洋久註（1）報告書。上杉和央『江戸知識人と地図』（京都大学出版会、2010 年）。

16）西本昌弘「平安時代の難波津と難波宮」（続日本紀研究会編『続日本紀と古代社会』、塙書房、2014 年）250 頁。
17）三好唯義・和島恭二雄註（６）論文 154 ～ 160 頁。
18）大澤研一註（11）論文 304 頁。

国立公文書館所蔵「摂州大坂旧地図」・「大坂分町地図」のトレース図について

①トレース図は、それぞれ概略図・【Ａ区】天満周辺【Ｂ区】三津周辺【Ｃ区】四天王寺周辺からなる。

②両図の識語は、省略した。識語については、その内容を検討した上で報告したい。

③トレース図の縮尺は、一定ではない。

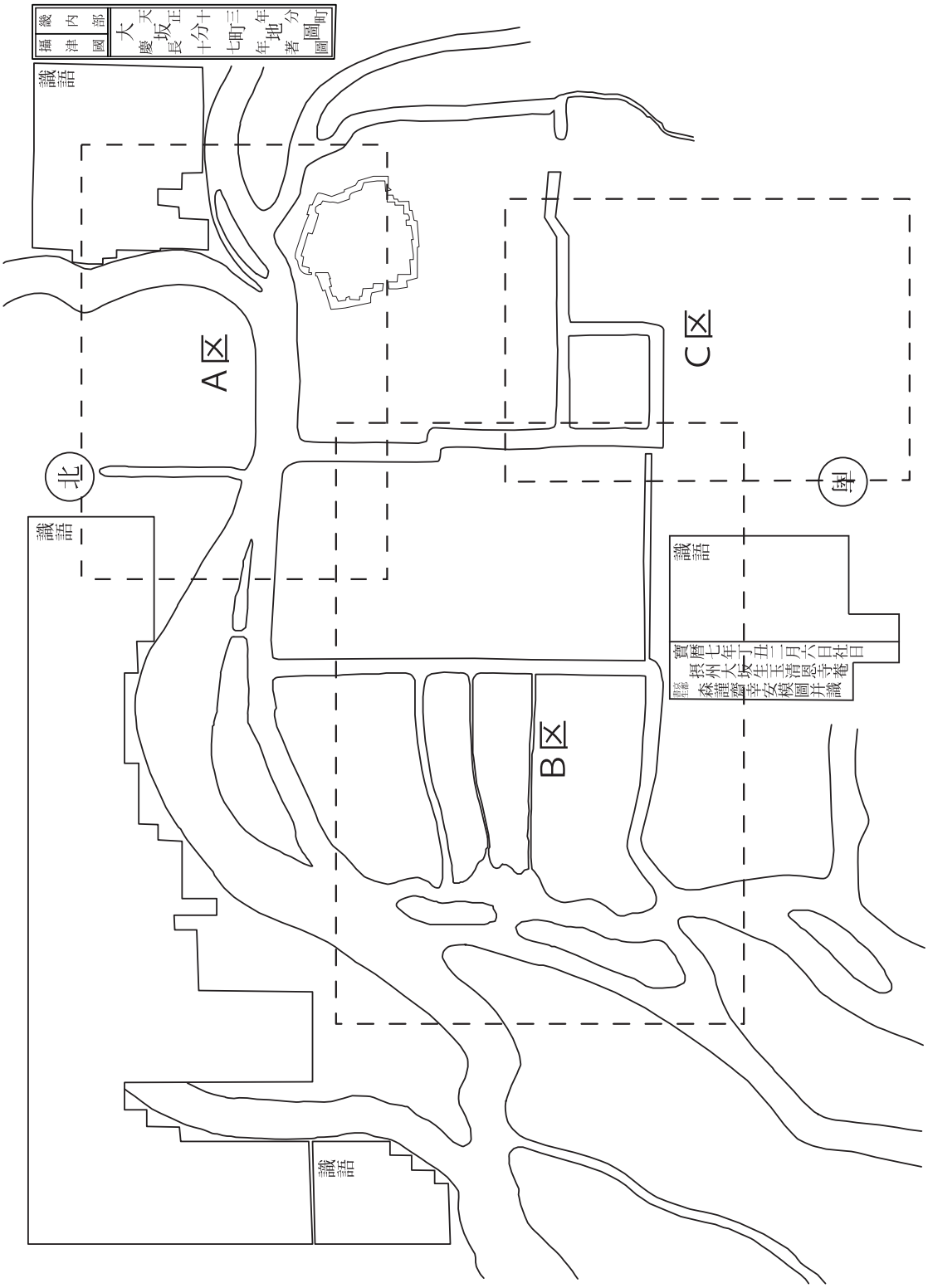

図１　大坂分町地図―概略図

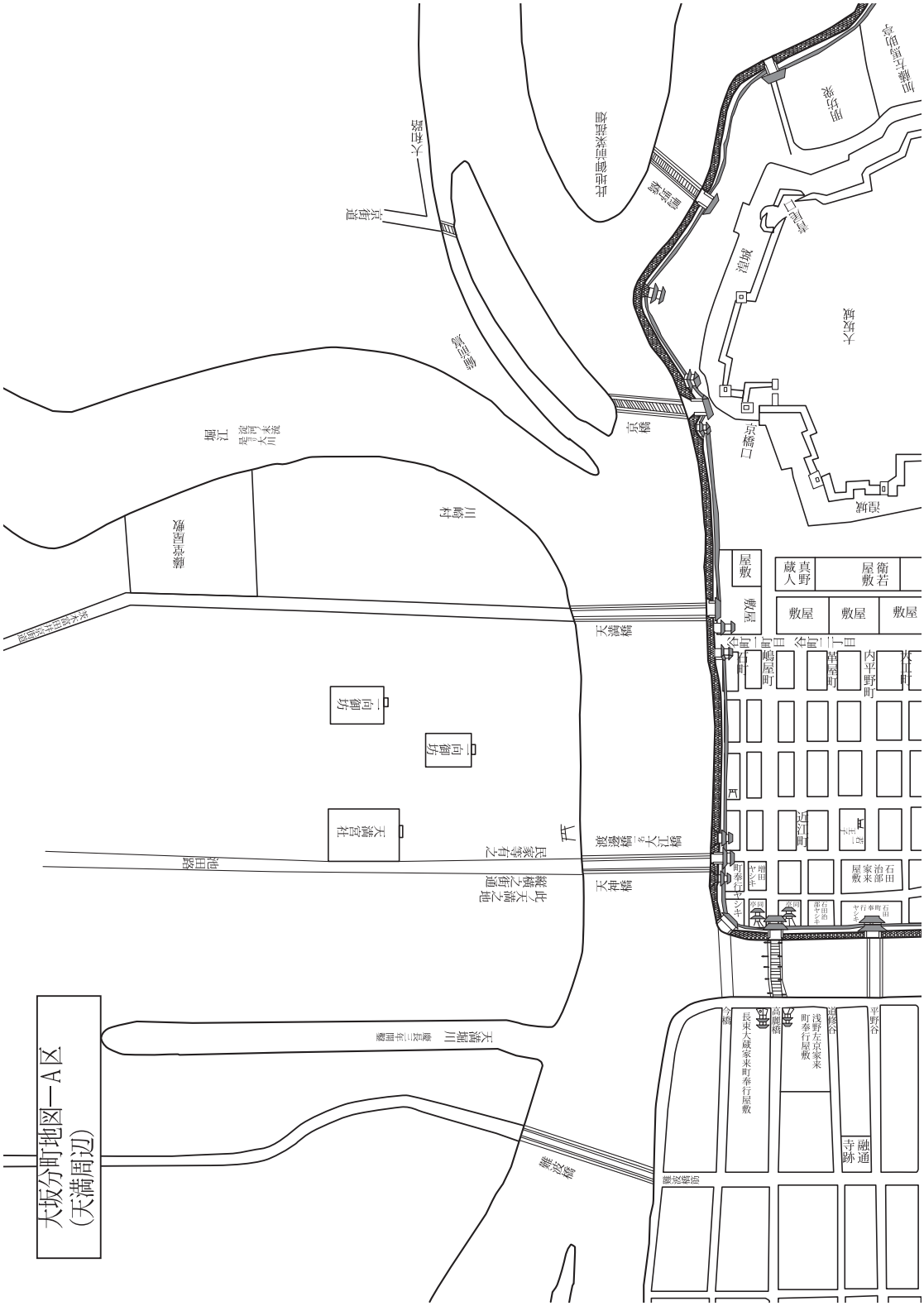

図２　大坂分町地図―Ａ区（天満周辺）

図３　大坂分町地図—Ｂ区（三津周辺）

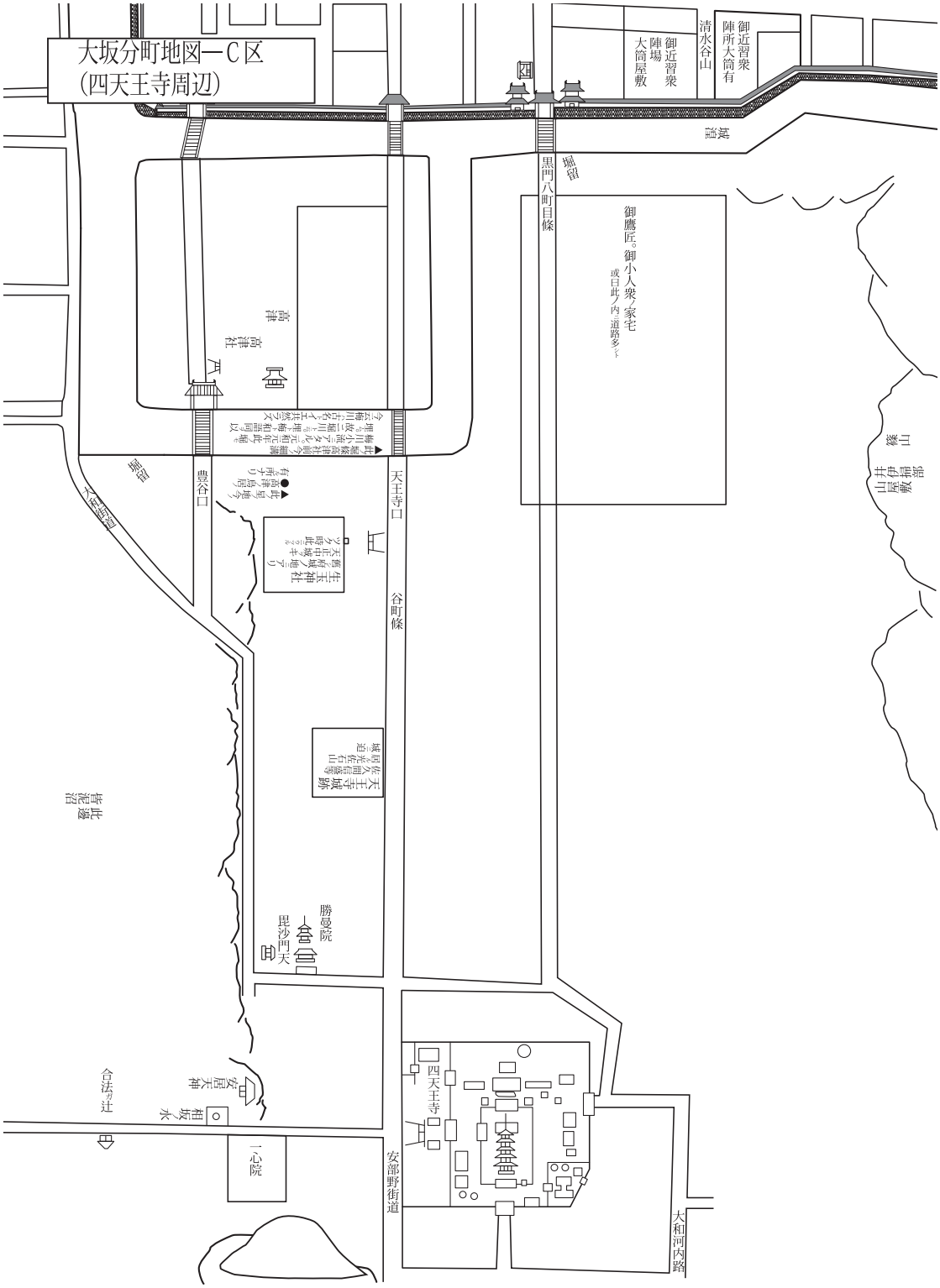

図４　大坂分町地図―Ｃ区（四天王寺周辺）

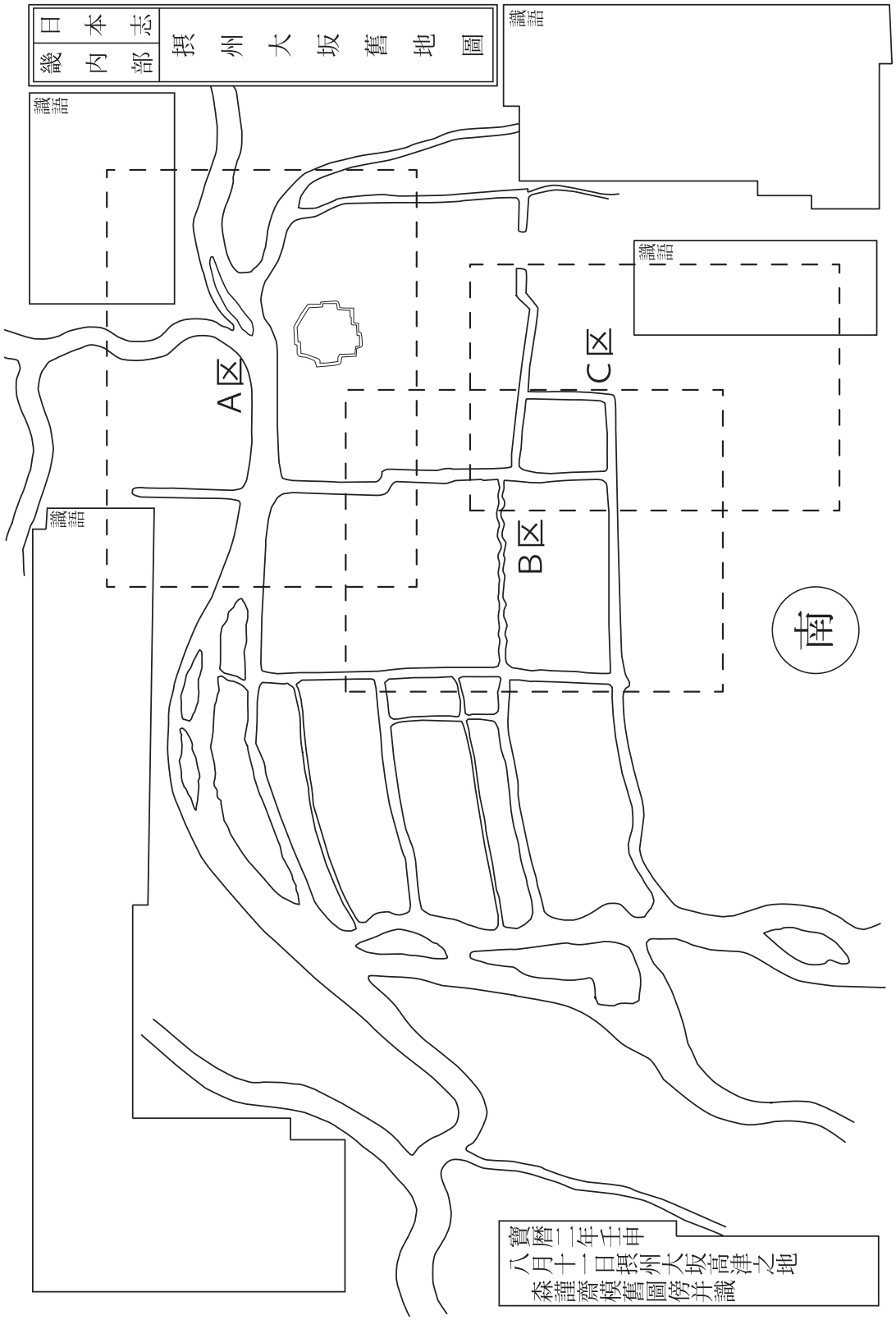

図５　摂州大坂旧地図―概略図

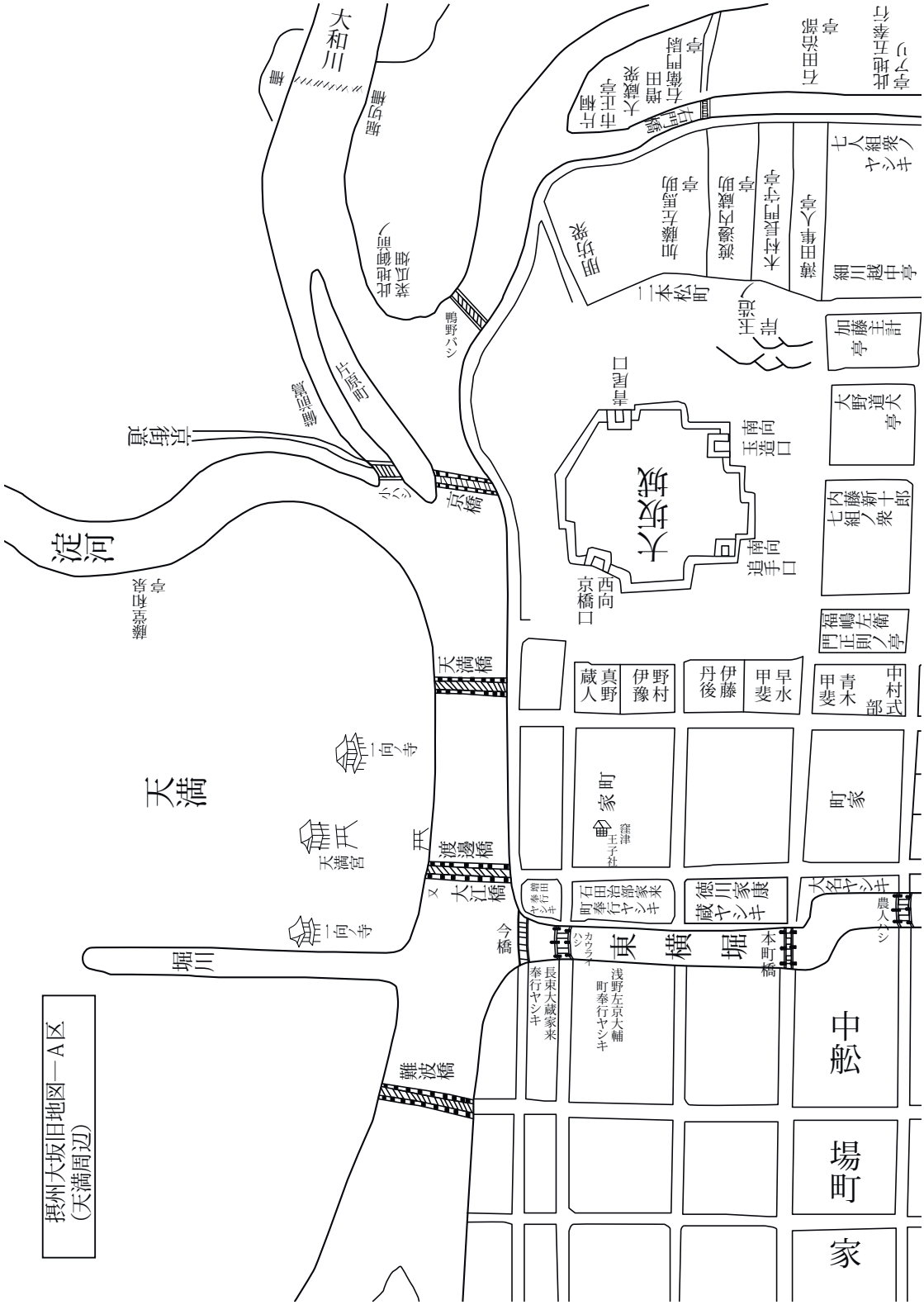

図６　摂州大坂旧地図―Ａ区（天満周辺）

摂州大坂旧地図―Ｂ区
（三津周辺）

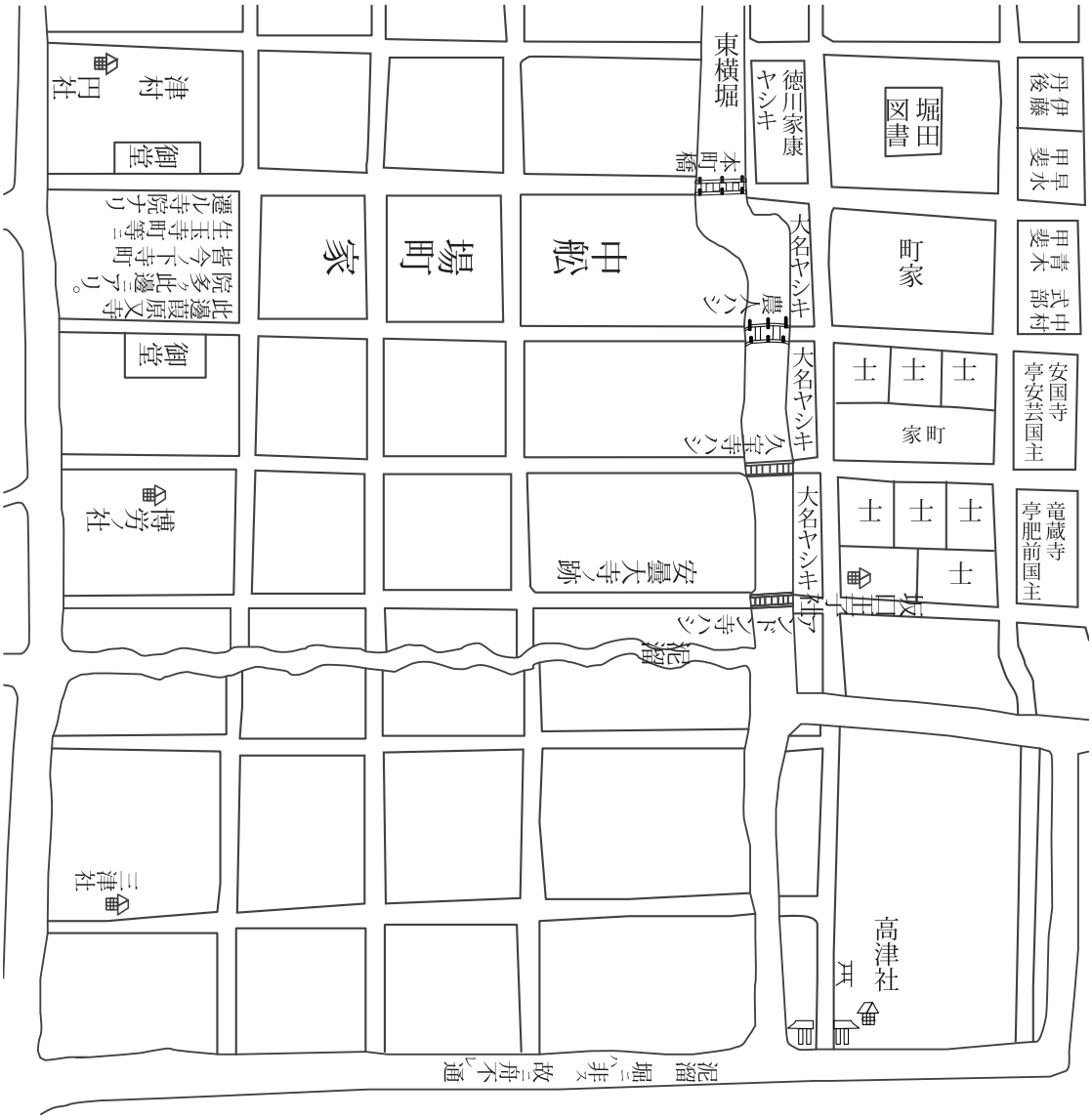

図７　摂州大坂旧地図―Ｂ区（三津周辺）

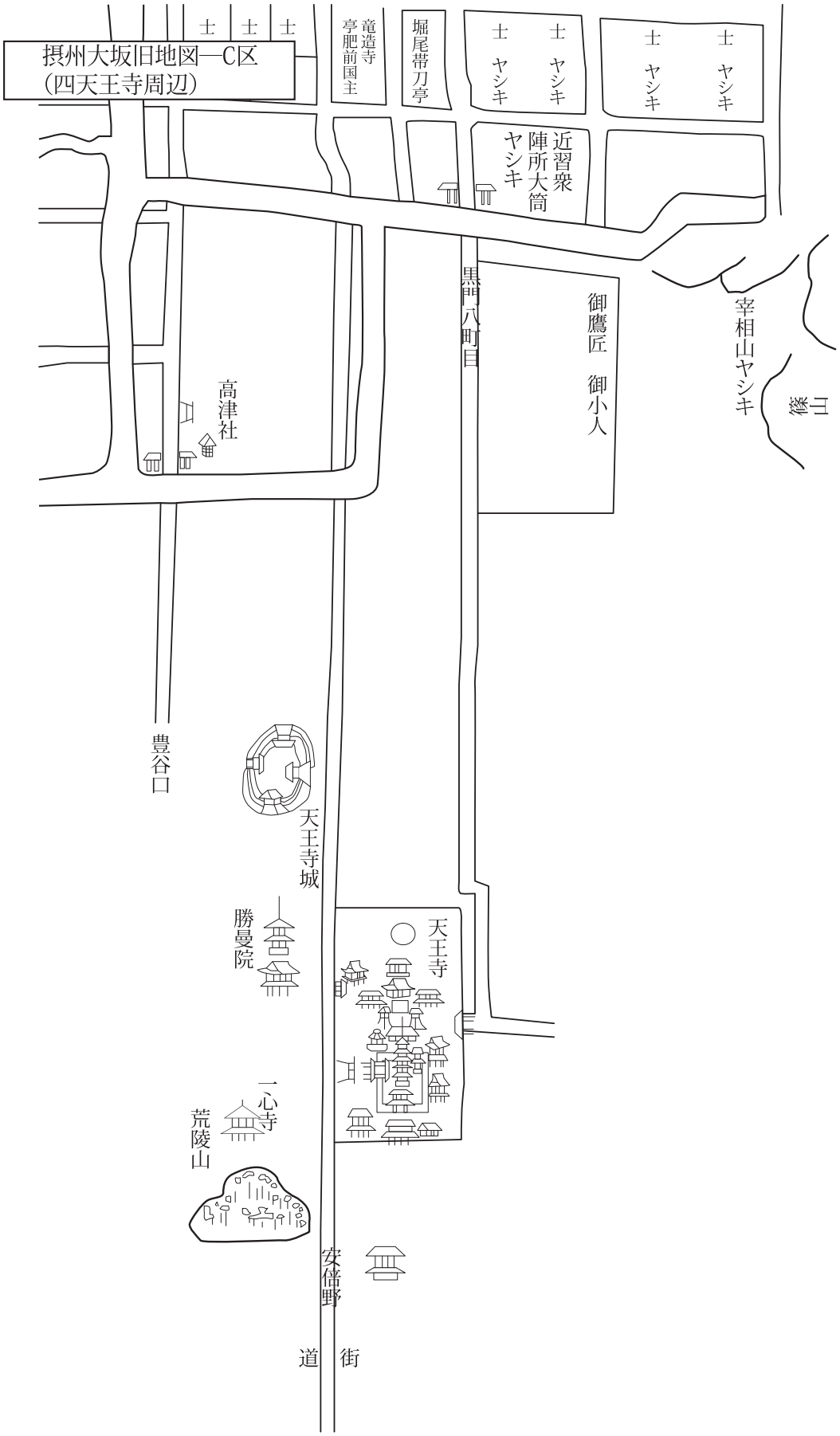

図８　摂州大坂旧地図―Ｃ区（四天王寺周辺）